

現職研究レポート

その二 R幼稚園の場合

角能清美



昭和五十三年度の幼児教育現職研究会は、例年と活動内容が異なり、研究協力園の保育者たちがそれぞれの幼稚園を実際に観察し、各園のもっている独自の特色や問題点を明らかにしようとしてきたものである。

R幼稚園の公開観察日は、昭和五十三年十一月十四日であった。雨模様であったが、子どもたちは、幼稚園にいろいろな思いでやってきて、一日を過ごした。

子どもたちは、ほぼ一日中、自由に遊んでいるが、保育者がそれぞれの子どもたちとたいへんいいねいに、細かく関わっている

ことが、この幼稚園の特色ともいえる。保育者が関わったことで、子どもたちはどのように変化したのか、また、関わる際に、保育者はどのような思いで関わるのかなどについて、保育者の間で細かな話し合いがもたれている。

まず、保育者が子どもとどのように関わっているのか、事例を掲げよう。

事例

三歳児M男は、「ぼくはのりものにのりたいたい」と言う。M男は片手にブロックをもち、自転車に乗ってホールへ行く。(廊下は自転車でも走ってもよいことになっている) 自転車に乗って、

ゆっくりペダルを踏んでいる。(ホールの中はいろいろな遊びで、子どもたちが右往左往しているのにM男は広々とした所にいるかのようにである) そこへA男が「バンバン」と言って、M男に対してピストルの手つきをする。M男も手にしているブロックをピストルに見たて応戦する。(しかし、M男はA男の遊びに積極的に関わりとうする意志はみえなかった) そこへ(T) (保育者)が、「あ! やられそう」「あ! うたれた」などと言いながら、M男とA男との戦いに大きく関わる。M男は自転車からおりて、本格的に戦いはじめる。「バキューン、バキューン」と言いながら一生懸命に応戦する。(T)はままごとのコーナーの子どもに声をかけられ、戦いから脱げると、M男とA男も戦いをやめる。M男は思い出したように自転車に勢いよく飛び乗る。(T)は、そんなM男に「いってらっしゃい」と声をかけた。M男は「おや?」という顔で(T)を振り返って見るが、だまって走っていく。

(A幼稚園M先生の記録より)

ここでは(T) (保育者) がごく自然にM男やA男と関わり、そして脱げていく場面がとらえられている。(T)が遊びに参加したことで、何気なく自転車に乗っていたM男と、そんなM男に関わりを求めたA男との関係が、より密接になったわけである。もしTがこのときに関わらなかつたら、二人がこれほどまでに熱心に「戦い」をしたかどうかわからない。ところが、(T)がままごとの子どもたちと呼ばれ、「戦い」から脱けたあと、二人は自分たちもやめてしまった。M男は思い出したように自転車に乗るのだが、(T)から「いってらっしゃい」と声をかけられたことは意外に思ったようである。(T)にしてみれば子どもの仲間としての「戦い」の相手である自分と、「いってらっしゃい」と声をかけた自分とは、どちらも保育者としての配慮ある言動であるのだが、M男にしてみれば、つい先ほどまで「戦っ」ていた、その相手から「いってらっしゃい」と声をかけられて、とまどいを感じたのかもしれない。子どもが自由に遊んでいるところに保育者がどのように関わっていくのかという課題は、多くの幼稚園がもっていることである。

M男は(T)から「いってらっしゃい」と言われ、意外そうにするが、そのまま走り去る。この場面では(T)の思いとM男の思いがずれ違ってしまったといえよう。しかし、(T)の関わりによって、子

ども自身が手がけている活動が明らかになり、生き生きと動き出すこともまた多いのである。

事例

M男が自分でも何を作ったのかわからないが、漠然とブロックを手にしているとTが声をかける。

(T)「M男くんのブロックは、まあ、そこがうえにうごくんですか。すごいですね。」

(M男はブロックの一部を上下させている。)

M「うん。こうもなるんです。」(早く動かしてみせる)

(T)「まあ、すごいですね。これはなんですか？ はしごしゃみたいですね。」

M「はしごしゃ、はしごしゃ。かじはどこですか？」

(T)「でんわで書いてください。」

M「かじはどこ？」

(T)「あつ、あつちです。」と言って、ホールへ移動する。M男はブロックの上下する部分をホースのようにしてもち、Tの後からホールへ移動する。

(T)「あ！ もえています。そこです。そこです。」

M「ジャー、ジャー」と夢中で水をかける様子をする。A男も加

わって消す。

(T)「あ、ここはきえました。あそこがまだです。」

M男とA男は夢中になって、台の上に乗ったり、かけ出したりして、いそがしそうに消す。

(T)「ありがとうございます。また、でんわで書いてください。」

M男とA男は、満足しきった様子である。M男はその後、ブロックをたいせつそうに、ホールの床上を走らせたり、そっと棚の上においたりして、他の遊びをした。昼食のための片づけのときに、M男は「消防の人、ながづはいるの」と言い、上ぐつははこうとしなかった。

(A幼稚園M先生の記録より)

この場面では、完全に保育者がM男の遊びを導いている。何ができたのか曖昧なM男のブロックを見て、どのように動くのかを興味をもったのも、また、「はしごしゃ」というイメージを出したのも保育者である。「はしごしゃ」というイメージからM男は「かじ」を連想する。そして再び保育者がホールへとM男を導いて、消火活動がおこなわれたのである。A男も途中から参加し、M男もA男も満足する活動ができたのだが、保育者のイメージと子ど

ものもっている活動のイメージ（遊びたいのだが、何をしてよいかわからないという状態であった）がびったりと一致したと考えてよい。

子どものひとりひとりの欲求にこたえていくことはむずかしいが、保育者の出したイメージが子どもに適したときには、大きな喜びとなって保育者にはね返ってくるものである。ひとりひとりの子どもが満足するような対応の仕方、あるいはことばがけは、いったいどのようにしたら可能になるのだろうか。R幼稚園の場合、これを可能にするために、保育者が子どもについて気づいたこと、自分の保育を振りかえって見ることを行なっている。これをするこゝによつて、自分の保育が見え子どもが見えてくるのだと思う。

次に掲げるのは、四歳児Nを中心に一人の保育者がどのように関わったのか、そしてまた保育後、幼稚園の保育者全体がそれどのようにとらえるのかの一例である。

Nは、少し乱暴な子どもであり、幼稚園の中ではしばらくの間、ボスの存在であった。しかし、他の子どもたちが成長したため、Nの言いなりにならなくなっている。この日はNは珍しく一人であった。

観察日 十一月十六日

対象児 四歳男児N

記録 保育者①

8:50 約三分の一の子どもたちがすでに登園している。かなり

多く（あとで調べると、バケツ五杯分位）の落葉が、園庭の端に吹きだまり、山になっていた。そこで私は、子どもたちを迎えて後、ちりとちとほうきを持って園庭に出た。

私はさっそく保育室のテラスの前に落葉をはき集める作業をはじめた。それを横目で見ながら「おはようございませす」と私に声をかけて部屋へ行く子。すでに私の回りには四、五、六歳の男女児数名。気が付いたらNがいる。そこへ横目で通りすぎていった子どもたちもかけてきて七、八名になる。

8:55 四歳女児「せんせい、なにしてるの？」 ①「何だと思
う？」と落葉をほうきで集めて山にしなから言った。

私は、はじめは掃除のつもりだった。

②「たくさん、葉っぱあるでしょ？」

五歳男児「風が強いからね。」

③「飛んでいっちゃう、ほらはら」と葉を指さし、二、三

名で風で舞う葉を追ったり、くずれた葉の山を直した。見ていた、四、五名の子どもたちも葉を追って遊び出した。

(M)「黄色の葉、かわいいでしょ。」

四歳女児「赤いのだってあるよ。」

(M)「ほんとね」

五歳女児「たくさんあるね。」

(M)「百くらいかしら」

五歳女児「ええ、もっとあるもん。」

(M)「そうかもしれないわね。」と言って葉の中にすわって、

足を葉の山につっこみ身体を小さくする。

たしかに何百枚もの葉であった。Nは、直接会話に参加しないが、やはり舞う葉を追って楽しんでた。ときどき私の足の上に葉をのせる。山が高くなると、ちりとりであたりをまいたりする。他の子は、これを見てすぐに葉を集めに行く。Nは集まった葉を他の場所に移しかえる。他の子どもたちはこのNの行動を迷惑にも感じていない様子で、葉の山をつくったりして楽しんでた。

ここに約十分間の活動の記録が述べられている。この十分間の

記録から、保育者たちは次のようなことを考えている。

この日の落葉は、子どもに訴えるもののある素材であった。

保育者のつもりとしては現実的な「清掃」として、葉をほうでぎ集めていた。これを子どもは「何してるの？」と保育者に問うている。子どもにとって、集めた葉を捨てるのか、それともこの葉で遊ぶのかということなのであろう。落葉を掃く音はリズムカルで、子どもも詩人になれるような朝の風景である。保育者は、子どもの問いに対しては、「たくさん、葉っぱあるでしょ。」と答え、本来の自分のつもりである清掃のことにはふれていない。子どもは「うん、風が強いからね」と答えている。これは葉が落ちるまでの過程がすべて含まれている答えである。保育者は、風で舞う葉のあとを追ったりする。そして子どもたちも葉を追ったり、葉の山を直したりする。このような経験のあとで、子どもは、葉がたくさんあることに気づき「たくさんあるね」と言う。保育者は「百くらい」と数で表わすが、子どもは、数では言えないくらいにたくさんあることを強調している。そこで保育者は、この子どもの気持ちを受けとめて、落葉の山の中に足をつっこみ、身体を小さくする。すなわち、この保育者は、落葉の山の中に体をうずめてみせ、落葉がたくさん

あることを身体をつかって表わしたのである。

そこへNが、子どもたちの状況をこわすような存在として参加する。他の子どもが作っている葉の山を散らすのである。けれども、他の子どもたちはNのことではちっとも困らなかつた。Nが運んでいってしまう葉の量よりも、周囲の落葉の方がかなり多かつたせいいか、Nの行動が全く気にならなかつたのであろう。N自身は、他の子どもたちよりも、自分に関わってほしいと保育者に伝えたかつたと考えられる。他の子どもたちが向いている保育者を見て、Nは不安になつたのである。他の子どもの遊びを妨げることによって本来なら、保育者から「Nちゃん」と声がかける。そこでNとしては安心できるのであるが、たくさんの落葉が、保育者をも詩的な気分にしたらせてしまい、保育者はNに声をかけなかつたのである。

この後、子どもたちの活動は次のように続いていく。

9 : 05 風がやむと自分で葉を散らす三歳女兒がいた。「ゆきのよう」という声も聞こえた。他の子どもたちも山積みされた葉を手で舞いあげた。葉の山がほとんど平らになつてしまつると、子どもが葉を舞いあげる時に、葉と地面の土までもが散るようになった。散つた葉や土を懸命にはらつてい

る五歳女兒もいる。また襟に土がはいり、困ってしまう子どももいる。これまでは、葉を空に向けて舞わせていたのが、他の子どもに向けて葉を投げる活動になつてき、(そのときの遊びの様子は雪合戦のつもりかなと思つた。しかし土が目にはいり、泣き出す子が出たり、誰のせいだといつて遊びが中断されると私は思つた) そこで、「目に土がはいるといたいんだから……」と言ひ、遊びが中断されないで、子どもに工夫したり、加減してほしかつた。このことばで、山をつくり直すことなどをしたりする子どももあらわれた。けれども相変らず両手で葉をとつて、私に投げつける。私は目にゴミがはいりそうだといつて困つてみせるが、Nはやめようとしなひ。他の子どもが葉の山をつくっているすきを見ては、ちりとりで散らしたりする。低くなつた葉の山を見ておどろく私の反応を喜んでいた。そこで「Nちゃん」と軽い口調で呼ぶとNはにやにや笑い出す。なおも、あれこれと注意を引く行動をとるNと、「どの葉が好き?」「これ。」「そう、せんせいも。」と会話をした。

これは、九時五分から約二十分間にわたる記録である。葉を自

らまきだした子どもであるが、葉だけではなく、土までも空に投げ出した。そこで保育者は、土が原因となつて、泣き出す子どもがでたら、この遊びが中断してしまうのではないかと考えた。保育者は、この遊びを続けてほしいが、土は投げてほしくないといい、その気持ちをどのように表現したらよいか、判断に困つてしまふ。そんな中でNが保育者に対して土や葉を投げる行為は、他の子どもたちとは異つた意味をもつていると考えられる。Nは、土や葉を保育者に投げることで、「ぼくはここにいるよ」と主張したととらえることができる。保育者はNに対し、やさしく「Nちゃん」と答えてやる。Nは、やっと保育者と関わることができ、ほつとして、うれしそうにやにやに笑い出したのである。この後、しばらく落葉と関わつていたNは、ひとりりでブランコに乗り、保育者と呼ぶ。保育者は手を振つて答え、Nの「おして」という要求にこたえてやるのである。

ここには、一日のうちのわずかの部分の記録と、それを保育者がどのように考えていくのかの例を示したものである。実際にR幼稚園の保育を観察し、またこのような報告を聞いた多くの他幼稚園の保育者からは次のような感想、意見が述べられた。

子どもが、幼稚園の中で「生活している」姿を感じる。それは、ひとりひとりの子どもとの関わりを細かくとらえようとして、いることから感じるものであろう。子どもたちがどのように遊んでいる、その遊びがどのように発展していったのかという遊びを中心にとらえるのではなく、ひとりひとりの子どもが、きょう一日をどのように過ごしたのか、保育者や他の子どもたちとどのように関わつたのかをていねいに見ていくことによつて、子どもの成長を把握していつている。けれども、子どもが要求したこと、保育者が子どもに提したことと食い違ふこともある。その食い違ひをひとつひとつとらえて、保育を振り返つてみることによつて、一層子どもを理解していくことができるのである。「○○の遊び」のように概念的にまとめてとらえるのではなく、子どもがゆつたりと生活している中で、それぞれの子どもに適した関わりを考えつている保育である。

R幼稚園では、保育者たちが、それぞれの子どもが、いまどのような発達過程にあるのか、そのためにどう関わつていくのかを話し合つている。そこで、子どもたちは「幼稚園」にきているというのではなく、家庭の延長線上に幼稚園があり、ゆつたりと過ごしているのである。

(秋草学園短期大学)